東日本大震災・原子力災害伝承館
令和２年度の事業実績

令和３年２月２８日 現在

■東日本大震災・原子力災害伝承館活動状況

・伝承館は、東日本大震災と福島第一原発の事故による未曽有の複合災害の記録と教訓を、国や世代を超えて継承し、復興に向かう福島の今を情報発信するため、以下の取組を進めてきた。

1　館運営の状況

（1）入館者数の状況

令和２年　９月２０日　開館

１０月１２日　１万人到達　２１日目※営業日数換算

１１月　８日　２万人到達　４６日目

１２月１４日　３万人到達　７７日目

２月２８日までの入館者数累計　３７，０５８人

※令和２年度目標：３０，０００人

※アンケート結果による入館者の状況分析は別紙のとおり

記念すべき1万人目の来館者となられた方（会津若松市からお越し）には記念品として小林副館長から当館のオリジナルシャツとクリアファイルを贈呈した。

（2）教育旅行による入館状況

教育旅行の訪問先として、開館初年度から多くの実績を積み重ねた。コロナ禍にも関わらず、県外から多数の学校を誘客できた。

ア　県内の学校　延べ８０校　４，３０４人
（小学校１４　中学校１９　高校４７）

イ　県外の学校　延べ１８校　１，６６０人
（小学校１　中学校４　高校１３）

県内外合計
延べ98校 5,964人

小学校　茨城県
中学校　宮城県、栃木県（２）、滋賀県
高　校　北海道、岩手県（２）、宮城県（２）、山形県、埼玉県、千葉県、山梨県、京都府、福岡県（２）

■資料収集・保存

・震災関連資料の収集、保存業務について、福島県が福島大学へ委託して収集・整理した資料約24万点を引き継ぐ。
・令和2年度の資料収集点数は約2万5千点。自治体や学校、企業、個人等から資料を収集。
・資料収集では屋内外の写真撮影をして記録を残し、収集物を検討。
・収集した資料は、燻蒸処理、一部写真撮影、データ整理までを実施。
・仮収蔵庫(旧県立小高商業高校)から当館収蔵庫へ資料を搬入。

資料収集の様子

資料の写真撮影・記録の様子

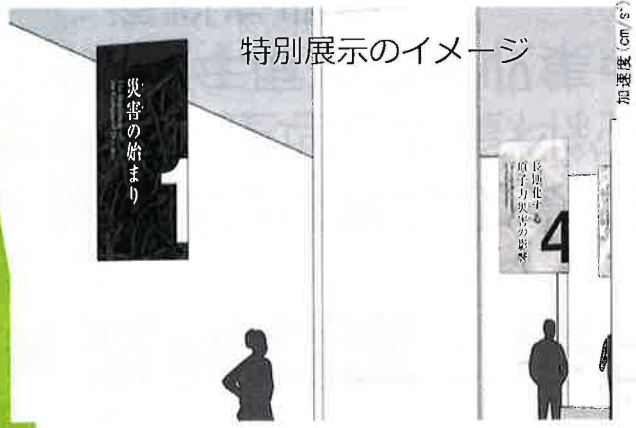
当館収蔵庫の様子

■展示（その１）

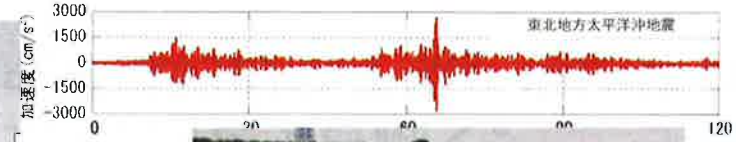
・発災から復興へ進む福島の姿を５つのテーマに沿って県が選定した170点を展示。

1.災害の始まり　⇒2.原子力発電所事故の対応　⇒3.県民の想い
⇒4.長期化する原子力災害の影響　⇒5.復興への挑戦

・県が行う常設展示の拡充と合わせ、 3月下旬から企画展示室を活用した特別展示を企画・実施予定。



特別展示のイメージ



特別展示の主な資料

■展示（その２）

・報道機関とタイアップし、震災関連の写真展を開催。
（令和３年2月17日～令和3年3月29日）
読売新聞写真部・福島民友新聞「3.11あの日からの10年」
福島民報社「いきいきふるさと＆震災10年の歩み」

読売新聞社・福島民友新聞写真展
「3.11あの日からの10年」展

福島民報「いきいきふるさと・
震災10年の歩み」パネル展

・福島市からの要請を受けて、福島市旧中合において「移動展示」を実施。
（令和２年12月15日～令和４年２月２８日）

福島市　震災復興パネル展

■語り部

・開館日は午前・午後それぞれ２回口演。開館から延べ４９５回開催。
講演テーマをホームページや館受付コーナー、語り部実施部屋前に表示
・館内語り部を育成するため、３回研修事業を実施。現在２９名の語り部の方が登録、口演活動を行っている。また、伝承館スタッフ2名も口演実施。

＜口演を聴いた方の感想等＞

・地元の方言で話していた姿が好印象。
・当時の状況を生々しく語っており、その状況を想像できた。
・震災、原発事故、避難生活等様々な立場の話が伝承館で聴けることが魅力。
・震災の恐ろしさや現在安心して暮らせているありがたさを感じた。

＜語り部の方の感想等＞

・同じ地元に住んでいた方と再会することができた。
・来館者の方と当時を振り返って話す機会を得ることができたのがありがたい。
・色々な人と、口演を通して関わることができるため、刺激を得ることができている。
・初めの頃は自信がなかったが、今は少し登壇が楽しみになってきている。

■研　修（一般研修）

展示見学に加えて、被災体験の口演やガイドとともに現地を巡るフィールドワーク、講師によるワークショップを組み合わせた研修事業を実施。

※主な実施例

・語り部講話（40分程度）
・フィールドワーク（請戸小⇒大平山霊園⇒双葉駅　60分程度）
・ワークショップ（研修の振り返り　60分程度）

※福島県観光物産交流協会との共同事業
これまで６２団体３，１６３人が参加。

学校関係	３３団体	２，５２０人
その他団体	２９団体	６４３人

<研修参加者の感想等>

・フィールドワークは報道と現地を目の当たりするのとでは大きく違うなと感じた。（福島県立福島高校）
・10年間当時のままの状態を見て心が重くなった。（福島県立あさか開成高校）
・時がたつにつれて忘れてしまうことも多く、改めて震災のむごさを知る良い機会になりました。　（山梨県立韮崎工業高校）
・震災の恐ろしさを伝える重要な場所と思う。（IHIグループ労連）
・原発事故で怖いのは放射能ではなく、人の人生を変えてしまうことと感じた（法政大学）

■研　修（専門研修）

・当館の上級研究員（非常勤）の指導の下、復興や防災に関する専門研修のプログラム（教員向け、自治体向け、原子力防災担当者向け等）を検討中。
・今年度は県内外の教員を対象にしたモニター研修を実施。教員研修のニーズの把握と具体的な研修プログラムへの反映について検討。

教員向けモニター研修の概要
11月28日～29日（１泊２日）　県内教員８人、県外教員４人　計１２人が参加

＜研修参加者の感想等＞

・復興が進んでいる箇所、進んでいない箇所を実際に現地を見ることができるのは意義が大きい。
・平時からの準備や地域とのつながりの重要性は、学びの観点で重要と感じた。
・原発事故と津波被害を同時に学べるのはよい。

■調査・研究

・令和２年４月１日付けで上級研究員（非常勤）３名を採用。

安田仲宏氏(福井大学教授)

関谷直也氏(東京大学准教授)

開沼博氏(立命館大学准教授)

・3/1　館長、上級研究員による座談会を開催。今後の研究方針や研究内容を検討。

・３/13　上級研究員による研究成果発表会を開催。

←座談会の様子

研究成果発表会の→様子

【発表テーマ】
安田研究員
▶研修等を通じた学びの場の創出の重要性について
開沼研究員
▶真の復興とは？社会関係資本が維持されにくい現実について
関谷研究員
▶情報発信の難しさ、課題の個別性について共通理解の進まない現実

・常勤の研究員（５名）を採用すべく公募と採用試験を実施し１名が合格するも辞退。次年度は着実に研究事業を推進すべく、館長、上級研究員と具体的な方策について協議を行っている。

■その他（イベント１）

・令和２年11月7日の合同開所式と合わせてオープニングイベントを開催。
・双葉町と連携し、地域活動団体による太鼓や演舞等のステージ発表などを実施。

【イベント内容】
①トークセッション
（高村昇館長、関谷直也伝承館上級研究員、武内敏英元大熊町教育長）
【テーマ】震災と原発事故から10年を振り返る。この記録と記憶を、教訓へ
②地域活動団体ライブステージ（双葉町産業交流センター　イベント広場）
（標葉せんだん太鼓、楢葉天神龍舞、浪江町相馬流山踊りなど）
③地域伝統文化・資源体験イベント（2階企画展示室）
（甲冑着付け体験、大堀相馬焼・双葉ダルマ絵付け体験）
④VR体験、ドローン操縦体験
⑤語り部講話、フィールドワーク体験

合同開所式

トークセッションの様子

ライブステージの様子

■その他（イベント２）

震災から10年が経つことから、令和3年3月にメモリアルイベントを開催。

テーマ「東日本大震災・原子力災害から10年　記録と記憶を後世へ」

①メインイベント（３月６日（土））

■基調講演　福島大学　小沢喜仁特任教授

■活動報告とトークセッション　テーマ「震災の記憶と記録を後世に引き継ぐ」２部構成

・福島大学環境放射能研究所　難波謙二所長兼教授が進行

・第1部：富岡町3.11を語る会 青木淑子氏、伝承館職員、大熊町教委職員が参加

・第2部：福島民報社 鞍田炎氏、福島民友新聞社 小野広司氏、県文化スポーツ局野地局長が参加

■ふたば未来学園高等学校による演劇

■オンライントークセッション

・岩手津波伝承館、長崎平和祈念館、広島平和祈念館と伝承館をオンラインでつなぎ、各館長又は副館長が参加。

トークセッション第２部の様子

ふたば未来学園高校演劇の様子

■その他（イベント３）

②特別講演

被災町村首長経験者による特別講演

■松本允秀　前葛尾村長（３月３日（水））

■渡辺利綱　前大熊町長（３月７日（日））

■菅野典雄　前飯舘村長（３月１４日（日））

東日本大震災・原子力災害伝承館研究成果発表会（３月１３日（土））

高村館長及び上級研究員３名（福井大学 安田伸宏教授、

東京大学 関谷直也准教授、立命館大学 開沼博准教授）による発表

③追悼イベント

大凧あげ、キャンドルナイト（３月１０日（水））

ピアノ生演奏、キャンドルナイト（３月１１日（木））

キャンドルナイト（伝承館広場）

首長経験者3名による特別講演

大凧あげ（伝承館広場）

■その他（地域交流）

・双葉町（双葉町産業交流センター）と連携し、地域交流の拠点としても活用。

例：会議室の相互利用、来館者が食事やお土産購入でセンターを利用

・双葉町と交流人口拡大に向けた具体的な方策について協議中。

←イノベ
シンポジウム
(12/19)

・伝承館語り部広場を利用し、震災後初めて双葉町内で「双葉ダルマ市」を開催。（1月9日）

・光のモニュメント開催。（2月11日）

双葉ダルマ市の様子（双葉町ＨＰより）

光のモニュメント

■その他（広報活動）

・効果的に伝承館開館をPRするため、報道関係者を対象とした内覧会を開催。

・開館に合わせ、テレビCMや新聞広告を実施。

・若者世代向けにはSNSを活用した情報発信を実施。

・開館後は、積極的に報道機関の取材に対応。

メディア向け内覧会

CM、新聞広告

インフルエンサー(鷲見玲奈さん)による情報発信

■その他（誘客活動）

・団体客を誘致するため、旅行会社や教育旅行関係者を訪問。

・JR東日本水戸支社等の視察対応を行うとともに、旅行商品造成を支援。

・県立高校や市町村教育委員会を訪問し、遠足等での利用をセールス。

【訪問実績】

▽県立高校等	105校
▽教育委員会等	14箇所
▽民間企業	89箇所（旅行代理店等）
▽その他	10箇所

東北観光推進機構・教育庁主催のオンラインセミナー等

・旅行会社や教育旅行関係者を対象としたモニターツアーを実施。

▽教育関係者モニターツアー

（令和3年１月～２月　開催　25名参加）

▽旅行関係者モニターツアー

（３月23日開催予定　19参加予定）

■その他（視察受入）

・開館前より、菅総理大臣を始め様々な要人が当館を視察。

①政府関係者視察	31件延べ246人
②自治体関係者視察	23件延べ166人
③民間企業等幹部視察	19件122人

9月26日　菅総理視察

12月19日　加藤官房長官視察

9月4日　内堀知事視察・職員激励

■研修室の利用状況

・開館以降、語り部講話や当館イベントのほか、各種会議やセミナー等で利用されている。

防災・伝承セミナー（10/24）

「復興知」成果報告会（12/5）

稼働日数　２７日（１３４営業日：令和３年２月まで）
稼働率 約20%　施設利用収入　約５０万円

●研修室利用料金表

使用区分（※1）	使用単位	利用料金
全面使用	全日	27,700円
	半日	13,900円
分割使用1	全日	13,500円
	半日	6,800円
分割使用2	全日	16,500円
	半日	8,300円

※1最大収容人数　分割使用1：54名、分割使用2：60名
全面使用　：120名

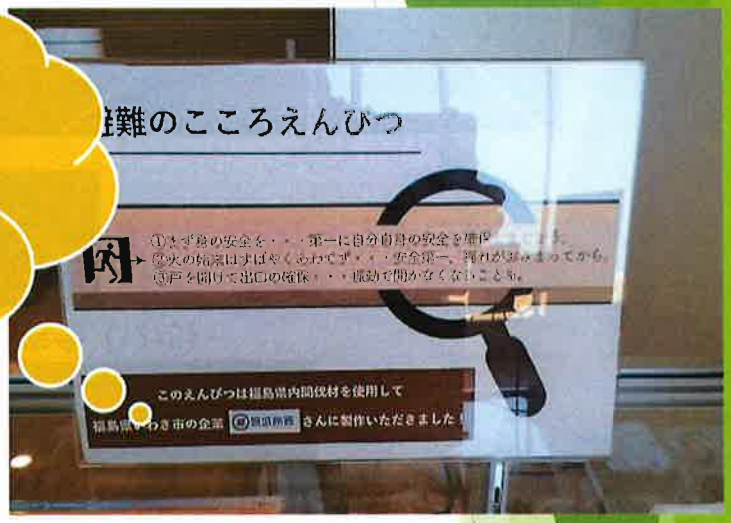
■収益事業

・来館者のサービス及び収益向上を目的に、防災グッズ等を製作・販売。
・現在、伝承館ガイドブックを製作中。4月から販売予定

●販売実績（Ｒ３年２月末時点）約111万円

●販売品目
・シャツ
・ブルゾン
・防災対策ボトル５点セット
・防災手ぬぐい
・防水ポーチ入りアルミブランケット
・８町村キャラクタクリアファイル
・８町村キャラクタガチャガチャ
・避難のこころえんぴつ

避難のこころえんぴつは、フジテレビの「めざましテレビ」で紹介されました。



売店（チケット販売窓口脇）

売店しているグッズ類（例）